

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム

# 私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*



## 全体の目次

前書き	p. 1
序章 現代—柏の葉地区の歩み—	p. 2
第1章 原始古代	p. 12
I 柏の遺跡	p. 13
第2章 中世	p. 33
I 古代から戦国時代の柏市域	p. 35
II 柏市の製鉄遺跡	p. 50
第3章 近世	p. 57
I 江戸時代の柏と小金牧	p. 59
II 柏の水運—手賀沼と利根川の開拓と物流—	p. 74
第4章 近代	p. 85
I 小金牧の開墾—十余二地区を中心として—	p. 86
第5章 柏市の農業	p. 93
I 昭和から平成までの変遷	p. 94
II 柏市の農業 トピックス	p. 105
第6章 (小金牧) 十余二開墾物語	p. 116
I 小金牧の開墾—入植時の苦労話—	p. 117
II 十余二の土壌と栽培作物に関する話	p. 118
III サツマイモ・農業に関する話	p. 119
IV 柏飛行場の開設に関する話	p. 120
V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話	p. 120
柏市とその周辺の歴史年表	p. 122
制作メンバー一覧	p. 126

はじめに

この書籍の制作は、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム A コース『柏の歴史、文化、産業』の開講がきっかけになっています。柏市に長年居住している人でも、柏地域の歴史や文化、そして経済についてよく知っているわけではありません。そこで、柏市のことを勉強するというプログラムが企画されました。

このプログラムを通して柏市の歴史に興味を持った市民が集まり、大学と一緒に、地域の歴史について勉強したり、調べたりして、この書籍を完成させました。2018年1月20日に第1回のミーティングが開催され、2020年2月22日まで20回以上のミーティングを重ねて作りあげました。

地球上のどこの地域にも、地域ごとに先人たちの歴史があります。その歴史が幾重にも積み重なり、私たちが生活している現代に繋がっています。この書籍は千葉大学柏の葉キャンパスが位置する十余二地域を中心にして、まとめてあります。この書籍を手にとった方がこの地域の歴史を知ること、この地域への愛着を少しでも持っていただけたら幸いです。

なお、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラムは柏市教育委員会文化課と経済産業部に協力していただきました。そして、この書籍の作成には、プロジェクトの立ち上げ当初から柏市教育委員会文化課に多大なるご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2020年9月1日

千葉大学環境健康フィールド科学センター  
野田勝二

## 第3章 近世

## 目次

I 江戸時代の柏と小金牧	
1. 概要	p. 59
2. 江戸幕府と柏	p. 59
(1) 江戸時代の柏	p. 59
① 大名本多氏	
② 大名の配置	
③ 江戸時代の村と飛地領の陣屋	
(2) 幕府の牧場小金牧	p. 60
3. 中世以前の下総の牧	p. 63
4. 江戸時代の小金牧	p. 64
(1) 江戸時代の小金牧	p. 64
① 小金牧	
② 野馬捕り	
(2) 牧の管理体制	p. 65
① 牧の管理	
② 享保・寛政の改革	
(3) 小金牧士と花野井 吉田家	p. 66
① 牧士	
② 吉田家	
(4) 野馬除土手と野付村	p. 67
① 野馬除土手	
② 野付村の負担	
(5) 享保期の新田開墾	p. 69
(6) 小金牧御鹿狩	p. 70
① 御鹿狩	
② 享保期の御鹿狩	

---

③ 百姓勢子	
(7) 相馬野馬追と小金牧	p. 72
① 牧と野馬追い	
② 相馬氏と相馬野馬追	
トピックス① 「野馬追之記」	
トピックス② 将門ゆかりの故郷を偲ぶ民謡	
II 柏の水運—手賀沼と利根川の開拓と物流—	
1. 概要	p. 74
2. 手賀沼	p. 76
(1) 手賀沼の歴史	p. 76
(2) 手賀沼の開発の歴史（近世）	p. 76
(3) 手賀沼～江戸湾（東京湾）運河構想	p. 77
3. 利根川	p. 78
(1) 利根川の水運	p. 78
(2) 利根運河の水運	p. 79
(3) 利根運河の建設	p. 80
4. “布施河岸・七里ヶ渡し”と“（通称）うなぎ道”	p. 81
(1) 布施河岸の七里ヶ渡し（渡船場）	p. 81
(2) （通称）うなぎ道～利根運河完成までの陸送路	p. 82

## I 江戸時代の柏と小金牧

### 1. 概要

江戸時代になると幕府は江戸に近い地域に譜代や旗本を配したり、直轄領としたりして守りを固めました。柏の多くの村々を領地として与えられたのは本多正重でした。本多氏は江戸中期になると駿河国田中藩へ移り、下総国相馬・葛飾両郡内の1万石はその飛地領となりました。

この頃、柏には50ぐらいの村がありました。村では検地が行われ、大勢の名請人と呼ばれる所有者名が記録に残されています。農民が連帯して年貢の責任を負う五人組が作られ、村をまとめるために、名主、組頭、百姓代の村方三役が責任者となりました。

柏周辺は、平将門の頃から馬の放牧地として知られていましたが、江戸時代になると幕府が直接管理する「小金牧」が設置されました。小金牧には「高田台牧」<sup>たかただいまき</sup>「上野牧」<sup>かみのまき</sup>「中野牧」<sup>なかのまき</sup>「下野牧」<sup>しものまき</sup>「印西牧」<sup>いんざいまき</sup>の5つの牧がありました。小金牧では年1回幕府に馬を差し出すために「野馬捕り」<sup>のまど</sup>が行われ、付近の農民が人足として駆り出されました。日頃から、馬が田畑に入らないように野馬土手<sup>のまどて</sup>を作ったり、牧場の手入れをしたりと、大きな負担がありました。

幕府は牧の管理運営のため、周辺の有力農民の中から牧士<sup>もくし</sup>を任命しました。また、牧の維持のため、野付村という牧近隣の村から労働力を提供させました。花野井村の吉田家はこの牧士を文政9（1826）年から代々勤めました。

福島県相馬地方の相馬野馬追は、相馬一族がその信仰する妙見神に駿馬を捕えて奉納する妙見信仰と深く結びつき、相馬氏の遠祖平将門が下総国葛飾郡小金原に野馬を放牧し武術調練したという故事に始まります。

### 2. 江戸幕府と柏

#### (1) 江戸時代の柏

##### ① 大名本多氏

江戸時代になると親藩、譜代、外様の大名が各地に配置されましたが、元和2（1616）年柏周辺に領地を得たのが本多正重でした。徳川家康の参謀として重要な働きをした本多正信という重臣がいましたが、正重はその弟です。江戸時代中

期になると本多氏は駿河国田中藩に移りますが、正重以来の下総国相馬・葛飾両郡内の1万石はその飛地として残りました。下総の飛地領には、葛飾郡船戸村と同郡藤心村にそれぞれ船戸陣屋（中相馬御役屋敷）と藤心陣屋（南相馬御役屋敷）が置かれ、代官が常駐しました。船戸陣屋が統括した地域を中相馬領、藤心陣屋が統括した地域を南相馬領と呼んで区分していました。

今でも藤心には、本多氏が配置した代官所の跡が残っています。また、かつて柏市北部にあった田中村の村名は、本多氏が治めていた田中藩（駿河国）からとったものだといわれています。

## ② 大名の配置

このほか柏の近くには、小金城（松戸市）に徳川信吉（家康の五男）が、山崎城（野田市）に古くからの徳川氏重臣の岡部長盛が、関宿城（野田市）に家康の弟松平康元がそれぞれ領主として入城しました。しかし、小金城と山崎城は、その後幕府直轄地（天領）となり取り壊されました。このほか、東葛地方は旗本や御家人の領地となっており、さまざまな領主がいたことから「碁石混じり」と呼ばれました。

## ③ 江戸時代の村と飛地領の陣屋

領主は、村役人に明細書等を書かせ、収穫高や人口、馬の数、作物の種類等村の様子を細かく報告させたので、今でもその様子を知ることができます。

陣屋の代官は、春から田植え時分にかけて村周りをし、秋彼岸頃には作柄を調べる検見を行い、領民の人数は2年に1度、その宗旨は毎年9月に調べました。また、馬の調査は年3回実施しました。このように代官の仕事は多岐にわたるため、領内の有力農民のなかから手代を選び、補佐にあたらせました。

### (2) 幕府の牧場小金牧

柏周辺は、平将門の頃から馬の放牧地となっており、優れた馬を育てる地域でもありました。江戸時代になると幕府が小金牧を設置し、野馬奉行を置いて直接管理するようになりました。

小金牧には「高田台牧」「上野牧」「中野牧」「下野牧」「印西牧」の5つの牧があり、鎌ヶ谷や白井、船橋まで広がる大きな牧でした。このうち「高田台牧」「上野牧」（一部流山市）「中野牧」（松戸市、鎌ヶ谷市も含む）が現在の柏市に当たります。

小金五牧は葛飾郡、印旛郡、千葉郡の3郡にまたがり、野付村々（牧に隣接している村）も222か村、総村高5万2,643石という広大な地域にわたっていました。

小金五牧のそれぞれの位置を、現在の主な地名に当てはめてみると以下のようになります。

- ・高田台牧 柏市十余二、中十余二、新十余二、柏の葉、他
- ・上野牧 柏市豊四季、柏1～3丁目、明原、泉町、中央1～2丁目、千代田2丁目、富里1～2丁目、他
- ・中野牧 鎌ヶ谷市初富、松戸市五香、六実、柏市高柳新田、他
- ・下野牧 船橋市二和、三咲、高根台、習志野台、他
- ・印西牧 白井市十余一、他

柏市には所々に起伏に富んだ地形があります。江戸時代、手賀沼周辺や大津川、大堀川沿いの低地では、水田耕作が行われましたが、台地やその周辺の林には、野生の馬が千頭以上はいたといわれています。

幕府は、馬があまり来ない平地を耕し、新田になるように進めました。これらが塚崎新田や今谷新田（中新宿村）といわれるところです。

小金牧では、年1回幕府に馬を差し出すために「野馬捕り」が行われました。牧に放されている馬を「捕込<sup>とっこめ</sup>」という土手で作った囲い（柏市では今の柏第2小学校付近にもあったといわれる）に追い込んで捕えたそうです。

このような時には、付近の農民が<sup>にんそく</sup>人足としてかり出されました。その他、農民は野馬が田畑に入って来ないように野馬土手を作ったり、手入れをしたり、牧（野馬）の見回りと、当時の農民には大きな負担になりました。



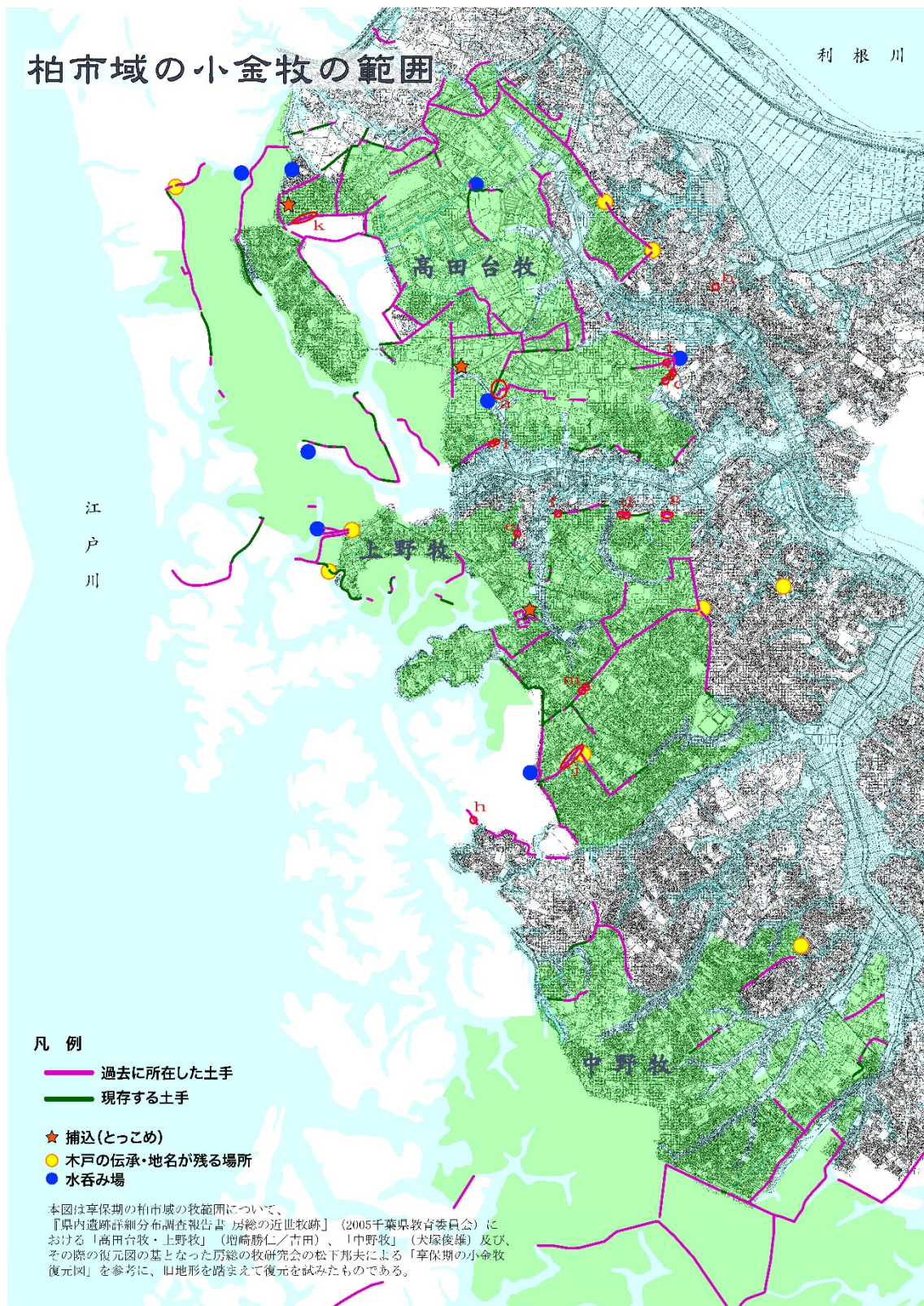


図1 柏市域の小金牧の範囲（「柏市史（原始古代中世 考古資料）」から引用）

### 3. 中世以前の下総の牧

日本人にとって馬が密接な関係になるのは、5世紀末以降です。先史時代にも、日本列島に馬は存在しました。ところが、縄文時代に絶滅してしまいました。その後、古墳時代に至って、朝鮮半島からもたらされた馬が、全国へと広まってきました。その馬は、家畜化されたもので、飼養技術を持つ人々とともにもたらされたことによって、日本における馬利用の文化が発生しました。

馬は、とくに軍事的なツールとして普及していきました。そのため、ヤマト朝廷は、馬匹生産の制度を整備していきます。天智7(668)年7月、近江国(滋賀県)に多くの牧を設置して馬を放牧したとされます(「日本書紀」)。文武4(700)年3月諸国に牧を設置して牛馬を放牧させました(「続日本記」)。これが全国的な官制の牧の設置です。そして、養老令[養老2(718)年改修、天平宝字元(757)年施行]に、<sup>きゅうもくりょう</sup>厩牧令が設けられ、官制の牧の経営・管理に関する規定が定められ、牧の経営制度が確立しました。なお、厩牧令は、大宝令[大宝元(701)年]以前の令には確認されていません。

官制の牧は、兵部省配下の兵馬司によって管轄されました。そして、牧ごとに、牧の責任者の<sup>ほくちょう</sup>牧長1人、文書事務に当たる<sup>まきちょう</sup>牧帳1人、馬牛一群(100頭)ごとに<sup>もくし</sup>牧士2人を置くこととされました。官制の牧の管理・運営は彼らが担いました。放牧中に馬を瘦せさせたり、失ったり、あるいは母馬100頭に対して<sup>こまとく</sup>駒犢(子馬・子牛)60頭という規定の繁殖数に達しない場合には罰せられ、弁償責任を課せられました。その一方で、規定以上に駒犢を増やした場合には報奨として種を受け取ることができました。このことは、彼らが私的にも馬牛を飼育していたことを示しています。彼らは<sup>よう ぞうよう</sup>庸や雑徭などの税負担を免除されており、馬牛の飼育に専念できるように配慮されていました。

この頃の牧の馬の生産方法は、一年中放牧して自然に増殖させるというものでした。自然に増殖するとオス馬が増加しすぎ、発情期のオス同士の闘争が激化します。そのため群が不安定になります。こうした状況を回避するために、若いオス馬を捕獲して、軍馬に充てるというシステムが採用されました。この若いオス馬捕獲が野馬追いです。福島県相馬市で行われる野馬追い行事の起源は、増殖するオス馬を捕獲するという馬生産のための作業でした。

#### 4. 江戸時代の小金牧

##### (1) 江戸時代の小金牧

###### ① 小金牧

下総国は古くから軍馬供給の地とされ、10世紀前半の「延喜式」では官牧が置かれていたことが知られます。そして江戸時代にも、軍馬の外に輸送用・農耕用の駄馬を民間へ供給することを目的に、下総国に小金・佐倉牧の2牧、安房国に嶺岡牧という幕府直轄牧が置かれていました。このうちの小金牧は、下総台地上の葛飾・印旛・千葉の三郡にまたがり、高田台・上野・中野・下野・印西の5牧からなっていました（もとは、新田開発により廃止された庄内牧、中野牧に統合された壱本(いっぽん) 櫛(くぬぎ) 牧を加えた7牧)。このうち柏市域に係わる牧は高田台・上野・中野3牧です。

江戸時代の小金牧は、野馬の逃亡を防ぐために谷津地形を利用し、野馬除土手や野馬堀を設け、馬は広い丘陵上の野原や灌木のなかに放し飼いでした。そんな下総の野馬は、諸国の馬と違って粗食で寒暑に耐え、「20年以上荷物輸送にも耐えられる」頑強な馬でした。その上、廉価で飼育費も余りかからなかったということです。

###### ② 野馬捕り

野馬は牧に散在していたので、これを捕らえるためには1か所に集める必要がありました。それが野馬捕りで、年に1度（享保期以前は3年に1度）、<sup>とっこめ</sup>捕込（野馬を捕獲するための土塁で囲まれた施設）に野馬を追い込みました。野生馬を追い集める野馬捕りは、本や絵馬にも描かれるほどの年中行事となり、江戸からの見物客も集めるほどでした。

そこでは、調教のしやすい3歳馬を選別し、良馬は江戸城の厩へ送り、それ以外の子馬や母馬、種馬を除く野馬を民間に払い下げました。野馬捕りの古い例としては、慶長19（1614）年や元和6（1620）年が知られます。前者では馬96疋のうち8疋を「御馬」（上げ馬）として江戸城に送り、88疋を「売馬」とし、後者では145疋のうち5疋が「御馬」、<sup>もくし</sup>牧士や<sup>はくらく</sup>伯楽（後の牧士の長）の取り分を除く134疋が「売馬」で、江戸や小金町などの者たちに払い下げられました。

## (2) 牧の管理体制

### ① 牧の管理

野馬の飼育は半ば自然任せであったとはいえ、牧を管理・運営していくためには多くの人手がかかりました。享保期までの牧場支配は、老中配下の厩預<sup>うまやあずかり</sup>諏訪部氏が担当しましたが、野馬盗の露見を契機に明暦3（1657）年、小金御厩<sup>すわべ</sup>（松戸小金町）を設け、諏訪部氏の下役が詰めることになりました。そこでの実務を取り仕切ったのが千葉氏浪人の由緒を持つ綿貫氏で、先の慶長19（1614）年「小金之領野馬売付之帳」には「綿貫十右衛門」とみえます。ここからみても、小金牧の組織は慶長末年には成立していたようです。また、牧の直接管理担当者は周辺の有効農民が就任する世襲の牧士で、業務中は苗字帯刀、乗馬、鉄砲所持が許されました。小金牧では、牧士は目付牧士・牧士・牧士見習・野先見習の別があり、その給与は牧士金5両（享保期以前は馬2頭）、牧士見習金1両2分（同1頭）でした。その他、牧を維持するために野付村という牧近隣の村があつて、労働力を提供させました。

### ② 享保・寛政の改革

牧の管理体制は時期や牧により相違しましたが、享保・寛政年間の2度、大きな変化がもたらされました。下総の牧も幕府の改革と無縁ではられません。享保7（1722）年、小金牧と佐倉牧が老中支配から若年寄支配に移り、また勘定奉行配下の野方代官として小宮山壱之進昌世<sup>こみやまもくのしん</sup>が日暮村金ヶ作（松戸市）に陣屋（役所）を設け、小金厩預り（後の小金野馬奉行）綿貫氏とともに支配にあたるようになりました。代官である小宮山壱之進の狙いは、牧周辺の土地を野付村に新田開発させることにあり、それにともない牧の組織改革を実施しました。そこで、小金5牧の管理は、綿貫氏支配の小金御厩付きの高田台・上野・印西の3牧、代官支配の金ヶ作陣屋付きの中野・下野の2牧に分け、牧士も同様に2分しました（佐倉7牧は小金御厩付きの4牧と佐倉藩付きの3牧に分割）。続く2度目の改編は寛政5（1793）年のことで、小納戸頭取岩本石見守正倫が野馬掛として佐倉藩預かりの牧を除く野馬や牧地、牧士全てを一括管理することになり、牧運営の強化・合理化を図りました。岩本正倫は、嶺岡牧（鴨川市・南房総市の一部）の改革を行なった上で、小金・佐倉牧の下総2牧の改革に着手し、牧ごと



の焼印を作ることによって野馬の所属を明確にし、野馬増産のために寛政5年から向こう5年間の駄馬売り払いを中止させました。その他、小金・佐倉牧では、牧収入の増加を目的に、自生や植林した櫛(くぬぎ)を薪炭として出荷させてもいます。岩本は従来の習慣を改め、牧の管理を一元的に行い、野馬増産・経費節減を図りました。

### (3) 小金牧士と花野井 吉田家

#### ① 牧士<sup>もくし</sup>

牧の維持・管理を担ったのは野付村の農民でしたが、日常的に彼らを指揮し業務の中心にあったのが牧士です。元和5(1619)年「下総小金領野馬売付帳」に伯楽とともに「もくし」とあるのが初見で、野馬のために食料や飲料水の面倒をみたり、寒暑時の避難場所や野犬にも注意を払いました。また、傷ついた野馬や母馬からはぐれた子馬を世話し、馬数や年齢をチェックし、牧の周りにある野馬除土手<sup>のまよけ</sup>の整備監督も担当しました。

#### ② 吉田家

柏市内には小金牧創設以来の由緒を持つ牧士はおらず、江戸時代後期に牧士となった家として花野井村吉田家、松ヶ崎村吉野家、名戸ヶ谷村木村家の3家がありました。このなかの吉田家は、家伝によるとこの地に土着した相馬家の一族で、名主を務めるかたわら質屋や穀物商を営み、文化2(1805)年には醤油醸造を開始するなどの有力者であったとのこと。牧士としての由緒書によれば、文政9(1826)年吉田官蔵のときに松ヶ崎牧士吉野五右衛門の病気を理由にしてその跡役を継いだことに始まります。天保10(1839)年には「牧士役出精相勤候」とのこと目付牧士に昇進し、その後は2代目鷹助、3代目信次郎、4代目金五郎と続きました。この吉田家は江戸時代から明治～昭和期の多量の文書を伝えてきたことでも知られています。江戸時代の史料としては、本多氏による領内最初の検地である元和6(1620)年「下総国中相馬領花野井村地詰帳」(写)、村の様子が分かる元禄16(1703)年「下総国花野井村郷差出帳」などがあります。その他、牧士を勤めていた関係から鹿狩などなど史料も含まれます。



図2 「富嶽三十六景」のうち小金牧 船橋市図書館蔵

#### (4) 野馬除土手と野付村

##### ① 野馬除土手

牧と村の耕地の堺には、場所により野馬除土手・野馬堀が築かれ、野馬の逃走を防いでいました。土手の高さは3 mほどもあり、牧境の土手は「御普請」といわれ幕府や田中藩から手当てが出る工事もありましたが、「自普請」といって農民が自分たちの費用負担で築いたり修復したりする工事もありました。例えば、享和3(1803)年の高柳新田明細帳に「自普請之儀者野馬除堀長四百間程有之候」とあるのがこれで、同様の記載は周辺の村々の明細帳によく見られます。また、牧内には野馬追いに便利なように勢子土手が縦横に築かれていましたが、これは御普請といって構築・修復の際には手当てが支給されました。土手は大雨などにより崩れ、その修復には多くの人出がかかり、村にとって大変な負担となっていました。

次の写真は、高田台牧の大塚野馬土手の発掘調査時の写真ですが野馬土手の大きさがわかります。



写真1 柏大塚野馬土手の断面の調査 千葉県教育振興財団文化財センター

## ② 野付村の負担

牧近隣の村々は、野付村といって各牧に数十か村単位で付属していました。中野牧付き高柳村の享和元（1801）年の書上によれば、牧関係の毎年定まった人足として、「御野馬見廻り人足」毎日2人宛、野馬捕りの際の中野・下野・印西牧への「御野馬人足」など延べ870人余、その他御普請や自普請、病気や死んだ馬の「取仕舞人足」、耕地に入った馬の「追払人足」など数百人が課せられました。野付村は一方で馬を得やすく、牧内で薪をとったりその輸送に当たったりと現金収入の途もありましたが、牧内の獣や野馬に作物を食い荒らされることも多く、困難を強いられました。

そこに、野付村による人足軽減闘争が起こる要因がありましたが、なかでも寛政から文政の長期にわたる高柳村を中心とした嘆願活動はよく知られています。寛政12（1800）年、高柳村は捕馬の際、遠方の下野牧（松戸市・鎌ヶ谷市・白井市・船橋市）や印西牧（白井市・印西市）への人足免除を金ヶ作役所に歎願しました。これは、翌年に7か村・2新田を巻き込むことになりましたが役所に無視され、埒が明かないと見た本多領（田中本多藩）の村では享和3（1803）年に領主へと嘆願先を変えました。さらに文化元（1804）年、嘆願内容を整理して訴願

村を61か村に拡大させ幕府へ嘆願したものの、これまた要求は叶いませんでした。ついに文政10(1827)年、不誠実な対応にしびれを切らした村々は幕府3奉行への箱訴<sup>はこそ</sup>を断行することになりました。その内容は、中野牧付村々は遠方の印西牧に夜通し歩いて出かけなければならない一方、印西牧近辺にもかかわらず人足を出さない村があるのは不平等だということに尽きました。この結果は不明ですが、今では当然である行政上の「平等」性の追求が、当時であっても訴願活動の原理となり得たことが分かる事件でした。

#### (5) 享保期の新田開発

小金中野牧に設置された金ヶ作陣屋は、牧の開発拠点でもありました。地方<sup>じかた</sup>巧者<sup>こうしゃ</sup>(農政の精通者)として著名な代官小宮山杳之進<sup>もくのしん</sup>は、小金・佐倉牧の開発の命を受け、享保8(1723)年この陣屋を開きました。同じくこの年大岡忠相系の町奉行管下の代官は武蔵野新田の開発に着手し、また町奉行与力<sup>よりききゆうち</sup>給地が広がる上総東金領<sup>せんちやうの</sup>や千町野(茂原市)でも代官上坂安左衛門らによって開発が推進されていました。

小金牧・佐倉牧の開発は、これら享保改革新田開発政策の一環にありました。すでに寛文・延宝期には、庄内牧が新田開発されて消滅していて、印西牧周辺でも惣深新田<sup>そうふけ</sup>(印西市)が開かれていたように、低い丘陵や牧周辺の野にも開発がおよび新田村が成立していました。それでも水利が悪い台地までは新田の開発がおよばず、牧は維持されていました。しかし享保改革期には年貢収納の増大をはかって、いよいよ台地の高いところにある牧の内にまで開発の手がおよび、野馬の生育圏に浸食を深めることになりました。

その開発手法は、開発地が野馬に踏み荒らされないように野馬除けの土手を築くことが必須でした。土手の築造などは野付の村々の負担で行い、そしてその内側に開墾地を確保して、現地を畑に仕立てました。開発に着手してから8年後の享保15(1730)年、代官小宮山の検地が行われました。その検地帳では、水をさほど必要としない林の仕立てが中心で、植林された地面は「林畑」という地目で記録されていました。

この頃、江戸で燃材需要が高まりをみせ、<sup>くぬぎ</sup>櫛などが徳用の産物となり、林の開発が有効になってきていました。



## (6) 小金牧御鹿狩

## ① 御鹿狩

江戸時代に、小金牧の一角（現在の松戸市五香六実辺り）で、4回にわたって將軍家の御鹿狩<sup>おしがり</sup>が行われました。第1回と第2回は8代將軍吉宗の時で享保10（1725）年と翌享保11（1726）年に、第3回は11代將軍家齊の時で寛政7（1795）年に、第4回は12代將軍家慶の時で嘉永2（1849）年に行われました。

鹿狩の仕方は4回ともほぼ同じで、まず中野牧・下野牧の野馬を六方野（四街道市）に追い移しておきました。享保期の鹿狩は小金牧内の獲物で間に合いましたが、寛政期の鹿狩では、獲物数が少ないため数日前から、東は銚子、西は江戸川、南は大多喜、北は利根川辺りから追勢子人足が中野牧の將軍の御立場<sup>おたつば</sup>のある狩場を目指して獲物を追い立てておきます。その追勢子人足は、下総を中心に、上総、常陸、武蔵、相模国の一部からも徴用されていました。狩の当日には將軍が老中を始め、諸役人を引き連れ、作法（鹿狩のしきたり）に則った狩をしました。その獲物は、鹿・猪・兎・雉などでした。

この御鹿狩は、小金牧の近隣農民にとっても大きな関心事でした。鹿狩の目的の一つは牧内に大繁殖している鹿や猪・兎などの小獣類や鳥類による農作物被害の増加を食い止めることでした。しかし一方で鹿狩は軍事訓練を名目に掲げた一大行事という面を持ち、武士の「遊戯」として最高のものであり、それだけ裏方である農民達の負担は重いものでした。

## ② 享保期の御鹿狩

享保10（1725）年の吉宗の鹿狩は、3月27日に行われましたが、それに先立ち15日には役人や勢子人足は、一の手から七の手まで、7組に分けられました。そして鹿狩の3日前になると、まず上野牧・高田台牧、そして下野牧の牧内から鹿・猪を追い出し、狩場内に追い込む内払いが行われました。この追勢子人足には15歳以上60歳未満の元気な農民が動員され、各人長さ2間の竹1本と3尺の縄を持参し、この内1村当たり5人位は竹貝と称する鳴り物を持ち、2泊3日の食料と蠟燭<sup>ろうそく</sup>を持って定められた寄場<sup>よせば</sup>に集合しました。

勢子人足の人数は、一の手が1,415人、二の手が1,771人、三の手が1,499人、四の手が1,462人、五の手1,490人、六の手が1,466人、七の手が1,500人

で合わせて10,603人でした。勢子の多くは、小金五牧周辺の村々から駆り出されていますが、遠くは相模国からも駆り出されています。勢子の各寄場は、一の手は日暮村（松戸市）、二の手は逆井村（柏市）、三の手は高柳村（柏市）、四の手は栗野村（鎌ヶ谷市）、五の手は中沢村（鎌ヶ谷市）、六の手は大町新田（市川市）、七の手は紙敷村（松戸市）に置かれました。柏市域が関係するのは二の手、三の手、四の手でした。二の手では酒井根村の清兵衛、逆井村の藤左衛門・七左衛門、大青田村の宇左衛門・七郎兵衛、増尾村の兵庫、船戸村の忠左衛門・武左衛門が、三の手では大青田村の官右衛門、逆井村武兵衛、松ヶ崎村武兵衛・八左衛門が、四の手では柏村の五兵衛・勘兵衛がそれぞれ村方世話役となっていました。

「徳川実記」には、3月27日の狩当日、吉宗一行は、午前2時ごろ出発し、両国橋から船に乗り、葛飾郡小菅村（東京都葛飾区）で陸にあがり、小金牧に到着しました。お供衆には老中松平左近将監（佐倉藩主）を始め、若年寄・御側衆・近習などのほか、若手の外様の家臣もいました。大番組等の旗本が騎馬勢子500騎余り、歩行勢子2,000人余りでした。そしてこの時の獲物は、猪3、鹿800余、狼1、雉10羽という結果でした。

吉宗の2度目の御鹿狩は、翌享保11（1726）年3月27日に前年以上の規模で実施されました。この時の、勢子農民は3万人以上で、鑓や鉄砲で猪11、鹿500余が仕留められました。

### ③ 百姓勢子

鹿狩の際に鹿や猪を狩場まで追い込むのは、百姓勢子といわれた農民の役目でした。家斉の行った寛政7（1795）年の鹿狩には、武蔵・下総・上総・常陸の4か国381村から本人足だけでも7万人以上の勢子が参加しています。

村ごとに指定された勢子たちは、村名や人足数を書いた御用幟（のぼり）、威鉄砲、竹竿に捕縄、食料などを持って、三日三晩をかけて獲物を御狩場まで追い込みました。



図3 百姓勢子のいでたち (松戸市立博物館 改訂版常設展示) 図録

## (7) 相馬野馬追と小金牧

### ① 牧と野馬追い

野馬追いは、本来、馬の生産工程の一段階です。野馬を間引きするために、捕込とよばれる施設へ馬を追い込むことを、「捕込」「野馬捕り」または「野馬追い」と称されました。江戸時代の小金牧・佐倉牧では、追い込んだ野馬を、御用馬・再放馬・競売馬に区分けしていました。その野馬を追い込む行事の際には、多くの見物人で賑わったとのこと。野馬を追い込む情景は、牧が存在するところであれば、必ず見られたのです。

### ② 相馬氏と相馬野馬追

中世、下総国相馬郡を支配した相馬氏は、鎌倉時代末期、その一部が陸奥国行方郡（福島県南相馬市）に移住した結果、下総国に残った下総相馬氏と移住した奥州相馬氏に分かれます。奥州相馬氏は江戸時代を通じて相馬中村藩主として存続します。

相馬野馬追いは、相馬一族が、その信仰する妙見神に駿馬を捕らえて奉納する妙見信仰と深く結びつき、相馬氏の遠祖とされる平将門が下総国葛飾郡小金

原に野馬を放牧し、野馬を敵兵に見立てて軍事調練した、という故事に始まりません。

#### トピックス① 「野馬追之記」

幕藩時代、相馬藩では“野馬追祭り”は公式行事でした。延享元（1744）年、時の藩主相馬尊胤が徳川幕府に上程した「野馬追之記」が残っています。

「鎮守妙見祭野馬追いのこと、先祖、下総国居住の節小金原において野馬追仕り候。その後当郡に移り候以来、野馬追の場所は行方郡原町と申す所に東西二里余南北二十丁余の原に四方高土手を築き、西は原の外山林まで囲い入り、鎮守神馬として数百匹の駒を放し置き、先祖より今に至るまで毎年五月中の申の日野馬追仕り候。・・・」

#### トピックス② 将門ゆかりの故郷を偲ぶ民謡

民謡の“相馬流れ山”とは、下総国流山（流山市）をさしています。下総の流山を唄ったこの民謡が、なぜ奥州海道の相馬で心をこめて唄い継がれているのでしょうか。

“相馬流れ山”は、鎌倉末期の元亨3（1323）年、相馬師常から6代目の重胤（奥州相馬氏始祖）が下総国相馬郡を離れて一族郎党とともに陸奥国行方郡に移った時、重胤たちが故郷流山を偲んで唄った歌だといわれています。彼らが、それほど相馬の地を離れがたいと思ったのは、なぜでしょうか。

下総国相馬の地は、平将門の伝承と深く結びついています。“相馬流れ山”は、その将門故地を唄いあげ、野馬追い祭も、将門の領地だった小金原の野馬追い行事に由来しています。

---

## II 柏の水運―手賀沼と利根川の開拓と物流―

### 1. 概要

江戸幕府が開かれ江戸が政治の中心となりました。そのため、参勤交代制度、江戸城普請などをきっかけとして江戸の人口が増加し、大量の年貢米の輸送や、物資輸送が必要となりました。

江戸時代、東北諸藩では江戸への年貢米の輸送、廻米によって換金する必要がありました。当初は外海を通過して江戸に向かう航路でしたが、風待ちのために多くの日数を要し、鹿島灘や房総沖の難所を通ったりしなければなりません。これを避けるため常陸の那珂湊に入り、途中駄馬による陸送を伴うルートをとっていましたが、輸送力が限られていました。

江戸幕府は承応年間に利根川東遷事業を完成させました。その結果、利根川水系は関東平野に巨大な水路網を形成し、関東地方だけでなく、外海ルートと結ばれた津軽や仙台など陸奥方面との間で物資が盛んに行き交うようになりました。

このため利根川は、日本きっての内陸水路として栄え、本川・支川の沿岸には、荷を下ろす河岸が数多く設けられ蔵や河岸問屋が建ち並び、賑わっていました。

江戸から約 30 km と近い柏市域にも河岸が作られました。“布施河岸”は、江戸時代から明治初期にかけて、利根川舟運の物資を陸揚げして、江戸川の加村河岸（流山市）まで陸送し、江戸川を江戸まで舟運する輸送経路の要衝として繁栄しました。

明治 23（1890）年には利根運河が開通し、東京への舟運は従来と比較して航路、日程とも大幅に短縮できたため運賃も安くなり、最盛期には年間 37,594 艘もの船が利根運河を通りました。

この頃まで荷物輸送の中で重要な地位を占めていた舟運でしたが、鉄道の開通や道路の改良など陸上交通が発達し、舟運は徐々に衰退していきました。



図4 利根川水系・水運の図（千葉県立関宿城博物館所蔵図から引用（部分））



図5 柏市の旧水運要衝地（手賀沼・利根川の水路）



## 2. 手賀沼

### (1) 手賀沼の歴史

約 6 千年前、手賀沼から鬼怒川辺りまでは海でした。鹿島灘に開いた奥深い入り江となっていました。その後、海が退き陸地となり、低い所はそのまま水が溜まって湖や沼になりました。しかし手賀沼などはまだ利根川に繋がっており、江戸時代初期までは利根川を利用した舟運は手賀沼内まで入り込み平塚河岸、戸張河岸なども栄えていました。

柏市域辺りが海であった証拠に布瀬でクジラの化石（12～13 万年前）が出土しています。

手賀沼の岸辺は、江戸時代頃から米などの増収を目的として、度々大規模な開拓が行われ、その過程で手賀沼は閉じられ利根川からの直接的な舟運は不可能となりました。



図 6 手賀沼宝永絵図（柏市教育委員会）

### (2) 手賀沼の開発の歴史（近世）

江戸幕府が開かれた頃の手賀沼は、10 km<sup>2</sup>ほどの広さ（現在は 4.6 km<sup>2</sup>）、深さ 2 m ほどの沼で、一部で利根川とつながっていました。

江戸幕府は早くから新田開発のため、手賀沼の干拓に着手しました。開発をするには水路を作り沼の水を抜く必要があり、手賀沼と利根川の間に排水のために水門（<sup>いりひ</sup> 堰樋）が建設されました。

手賀沼は、利根川との水位差が少ないため、沼水を自然排水することが極めて困難です。地元民から“逆さ沼”と呼ばれるように、利根川の出水のたびに逆流

する洪水に襲われ、堤防決壊や坎樋が壊れて、手賀沼洪水を繰り返し、新田開発は思うようには進みませんでした。

手賀沼の開発を、年代を追ってみてみましょう。

表1 手賀沼開発の略史

開発年	開発に関するできごと
寛文 11(1671)年	江戸の商人海野屋作兵衛など 16 名が開発を請負う。 坎樋を設けたため、舟運はできなくなった。 10 年後の検地では、開発田畑は約 298 町歩、年貢米 122 石でした。
享保 12(1727)年	幕臣井沢惣兵衛が開発計画を作る。 江戸商人高田友清に出資、事業をさせる。 千間堤を作って沼を区切り新田作りを目論む。 10 年後元文 3 (1738) 年の洪水により千間堤は破壊される。
天明 5(1785)年	老中田沼意次が手賀沼を干拓して新田開発を行う。 工事費用は全国の大地主や大商人の財力があてられた。 翌年の竣工直後、洪水により坎樋、堤は完全に破壊される。
	以後、復旧されることはなかった。 昭和時代まで、手賀沼大洪水は続く。
昭和 38(1963)年	機械式排水が可能となる。
昭和 43(1968)年	手賀沼干拓が完了し、沼の水面積が半減する。

### (3) 手賀沼～江戸湾（東京湾）運河構想

江戸幕府は、後述 3. (1) のとおり利根川の東遷により内陸水運の大動脈を完成させました。内陸水運は、安全で輸送日数も安定しましたが、那珂湊や銚子湊から利根川を関宿まで遡り江戸川筋を下り江戸へ輸送することから、なんと



でも時間がかかったため、印旛沼、手賀沼辺りから江戸湾（東京湾）をつなぐ運河構想は幕府にとって課題となりました。

幕府にとっては内陸水運の必要性の増大と新田開発、地元農民にとっては沼の治水・洪水対策と新田開発を求めて東京湾への運河構想が希求されたのです。

徳川 2 代将軍秀忠が、手賀沼から江戸川への運送の水路を開発しようとしたが秀忠の死により中止となったとの記録（徳川実記）や、度重なる地元農民からの開発の試みなどの古文書も残っており、江戸時代初期から手賀沼から東京湾への運河開削の計画が幕府のみならず、手賀沼周辺の地元農民からも幾度も発案されましたが、実現には至りませんでした。

### 3. 利根川

#### (1) 利根川の水運

利根川の水運の歴史は承和 2（835）年の太政官符で、現在の墨田川に常設の渡船が存在し、物流を行っていた頃から始まります。

江戸幕府は、江戸湾（東京湾）に注いでいた利根川を、江戸を水害から守り、新田開発を推進すること、また、舟運を開いて東北と関東との交通・輸送体系を確立することを目的として「利根川東遷」を承応 3（1654）年に完成させました。

承応元（1652）年の“内川廻し”の完成とあわせて、<sup>なかみなと</sup>那珂湊または銚子湊から利根川を関宿（野田市関宿町）までさかのぼり江戸川筋を下って江戸へ運ぶ、物資輸送の大動脈の輸送路が完成しました。

これにより東回り廻船<sup>注1</sup>で江戸へ入る海上輸送の危険性と風待ちなどによる輸送日数の不安定さからは回避され、なくてはならない輸送路となりました。東回り廻船で運ばれた北海道や東北からの物資は、銚子で河舟（高瀬舟<sup>注2</sup>など）に積替えて利根川を遡り関宿で江戸川へ入り、江戸川を下って江戸へ運ばれたのです。しかし、これには多くの日数がかかる上、江戸後期になると土砂が中州を作り渇水期には舟の運行に支障が出るなど難題がありました。

これの代替え策の一つとして、布施河岸など利根川流域の河岸から江戸川への陸送の発達はありましたが、駄馬などによる陸送は、米などの重いもの、馬に載せられない大きなもの、数量の多い物資の輸送には不向きであり、利根川舟運の難題は明治時代まで解決されることはありませんでした。

注1：東回り廻船は、幕府領があった日本海沿岸から津軽海峡を経て本州沿いを南下、親潮と黒潮が交差し強い西風（特に冬季）が吹く房総沖を避けて房総半島の東を廻り、伊豆下田で風待ちした後、順風を得て江戸湾に入る外海江戸廻りの輸送ルートを目指すもの

注2：当時の利根川水運で多く使用された高瀬舟は、全長最大30m（米俵約1,300俵を運べる）の巨大な船もあり、他の地方より大型だった。



写真2 利根川の高瀬舟（旧吉田家住宅歴史公園）

## (2) 利根運河の水運

利根川を使った内陸水運が抱えた、輸送日数がかかること、渇水期には舟運に支障が出ることなどの難題を解決するため、明治時代になって利根運河という画期的な事業が実施されます。

利根運河は、利根川～江戸川間を結ぶバイパスの水運ルートとして、柏市船戸から流山市深井新田間を開削して利根川と江戸川を結んだ全長8.5kmの運河です。明治23（1890）年に完成しました。

運河の完成により、関宿を通る航路よりも、距離にして約40km、日数にして3日から1日に短縮できるようになり、時間・費用が大きく軽減したことで、多

くの船が運河を往来しました。運河開通から昭和の閉鎖までに通った舟は99万5,600隻以上(20,763隻/年平均)です。

その後、利根運河は、明治29(1896)年の土浦線(常磐線)の開通、自動車輸送の普及などで衰退し、昭和16(1941)年の台風による大洪水で壊れ舟止めとなったのを機に運河の役割を終えたのです。

昭和16年以降は利根川・江戸川の水量を調節する役割を担い、現在は運河及び周辺の自然を活かした憩いの場として活用されています。また、令和元(2019)年10月30日には文化庁の「歴史の道百選」に追加選定されました。

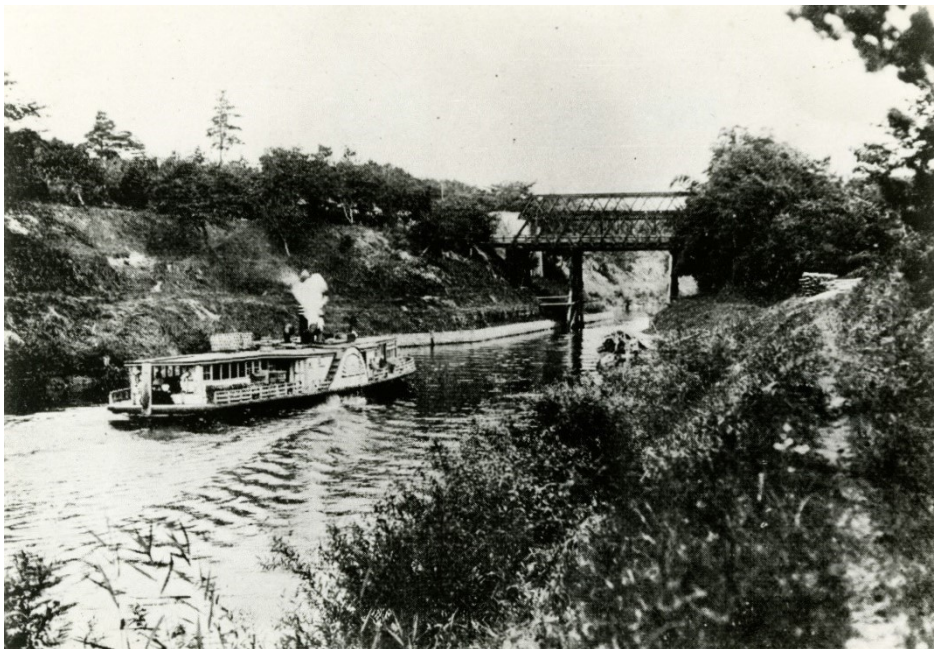


写真3 利根運河の外輪船 (大正4(1915)年, 柏市教育委員会)

### (3) 利根運河の建設

「利根運河計画」を推進したのは、広瀬誠一郎(茨城県議会議員)でした。当時、土木技術が進んでいたオランダの技師“ムルデム”に依頼し明治18(1885)年に「利根運河計画」を提出しました。また、ムルデムは現場監督としても活躍したのです。広瀬誠一郎などが明治20(1887)年「利根運河株式会社」を設立し、本格的に動き出し明治21(1888)年から2年の工期200万人(3,000人/日平均)が従事して明治23(1890)年竣工したのです。



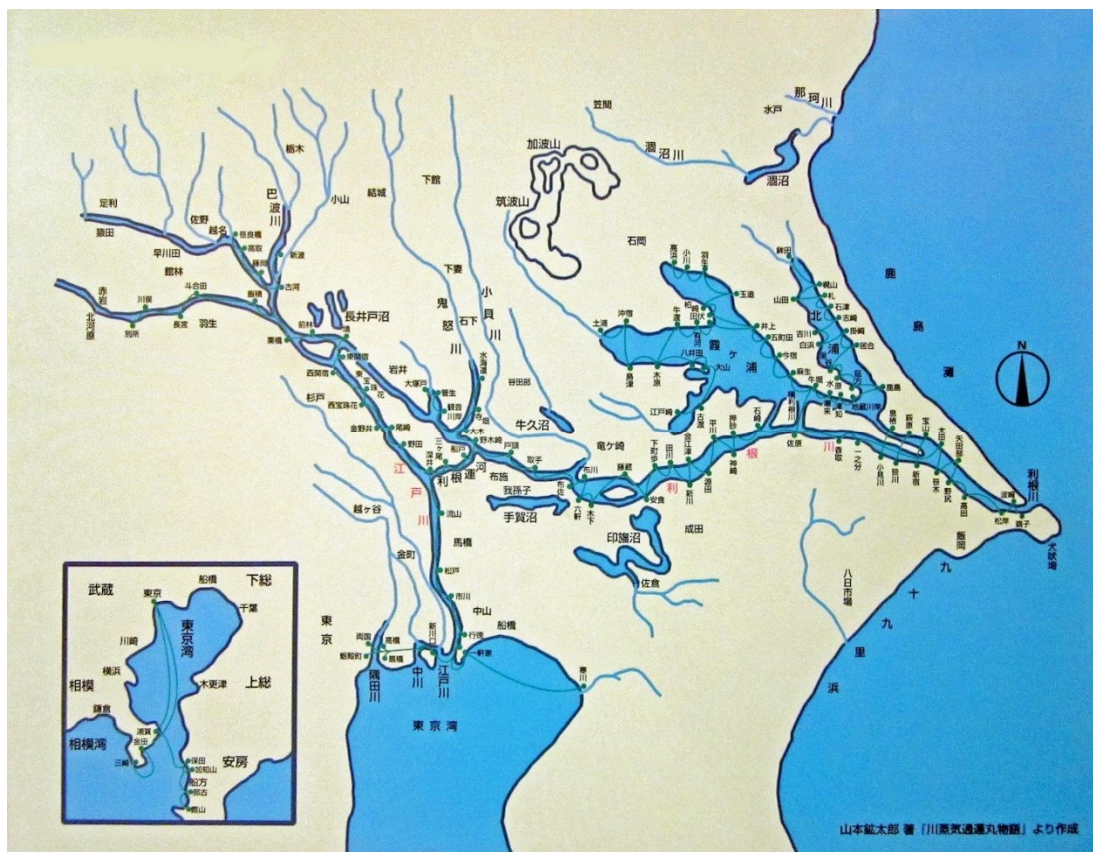


図7 明治中期の水路図（「川蒸気通運丸物語(山本紘太郎著)」を参考に作成）

#### 4. “布施河岸・七里ヶ渡し”と“(通称)うなぎ道”

##### (1) 布施河岸の七里ヶ渡し(渡船場)

関東三弁財天といわれる布施弁天(東海寺)の近くにあった布施河岸と戸頭(取手市)との間の「七里ヶ渡し」は、江戸時代以前からあったといわれています。

元和2(1616)年、江戸幕府から御定船場に指定され、特に布施の船着き場は利根川を往来する船の河岸場として繁栄しました。布施河岸には回船問屋や宿が十数軒あり、旅人や若い衆相手の茶店も軒を並べていたといえます。

なお、渡しの名は、布施村下の七里ヶ浜に由来するなどの諸説があります。



写真4 布施の渡し舟屋（柏市教育委員会）

## (2) (通称) うなぎ道～利根運河完成までの陸送路

江戸時代から明治初期にかけて、布施河岸（七里ヶ渡し）から高田（柏市）を  
通って加村河岸（流山市）まで荷駄馬の往来で栄えた物資輸送路（全長約14 km）  
がありました。

利根川の水路を使い輸送されてきた北海道や東北からの物資や、銚子沖で捕  
れた鮪や鰹などの海産物あるいは霞ヶ浦周辺の米穀などが「布施河岸」で陸揚げ  
され、駄馬で加村河岸へ運ばれ高瀬舟に積替えて江戸川を下り、江戸へ運ばれま  
した。この道は、手賀沼や利根川で捕れたウナギを生きたまま江戸の魚河岸へ運  
ぶことにも利用されたことから“(通称) うなぎ道”とも呼ばれています。

昔から利根川や手賀沼のうなぎは「天下の珍味」との記録があるほどで江戸の  
人々に喜ばれていました。捕らえた利根川のうなぎは布施から、手賀沼のうなぎ  
は戸張から高田を通して加村河岸まで運ばれ船で江戸川を下りました。布施と  
手賀沼から生きたまま運ばれてきたうなぎは、ともに高田の「水切り場（湧き  
水）」で水に浸して元気を取り戻させ、鮮度を保って江戸へ運ばれていきます。

布施河岸は、江戸へのいろいろな物流拠点として重要な役割を果たしていました。



写真5 手賀沼の漁業：船曳網（柏市教育委員会）

## 参考文献：

- 「郷土かしわ地理歴史」柏市教育委員会 中学校教科副読本編集委員会
- 「歴史ガイドかしわ」柏市史編さん委員会
- 「詳説日本史図録」詳説日本史図録編集委員会 山川出版社
- 「柏市制六十周年記念企画所蔵資料調査報告書 小金牧」柏市教育委員会
- 「下総・奥州相馬一族」七宮洋三著 新人物往来社
- 「柏市史 近世編」柏市教育委員会 平成7年7月31日発行
- 「柏市史（原始古代中世 考古資料）」柏市教育委員会 平成31年2月22日発行
- 「千葉県の歴史」石井進・宇野俊一編 山川出版社 2012年02月発行
- 「改訂版常設展示図録 小金牧と御鹿狩」松戸市立博物館
- 「河川交通と伝統産業」千葉県立関宿城博物館
- 「手賀沼の歴史・干拓」柏市教育委員会
- 「第3部手賀沼（1）近世開発の歴史」柏市教育委員会
- 「利根川の歴史・利根川の東遷」国土交通省 関東地方整備局
- 「利根川運河（利根川と江戸川をむすんだ川の道）国土交通省 関東地方整備局
- 「東葛観光歴史事典 東葛流山研究」（第16号“諏訪道”）山本紘太郎
- 「手賀沼—東京湾運河構想と手賀沼開発—」（かしわの歴史—柏市史研究 創刊号）中村 勝 柏市教育委員会、平成24年3月30日発行
- 「川蒸気通運丸物語」山本紘太郎
- 「柏の歴史よもやま話」浦久淳子 崙出版 1998年
- 柏市HP「七里ヶ渡し」最終更新日 2011年3月1日、2019年10月29日閲覧  
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280400/p001526.html>
- 国土交通省水管理・国土保全局HP「利根川」、2019年11月2日閲覧  
[https://www.mlit.go.jp/river/toukei\\_chousa/kasen/jiten/nihon\\_kawa/0316\\_tonegawa/0316\\_tonegawa\\_01.html](https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0316_tonegawa/0316_tonegawa_01.html)



柏市とその周辺の歴史年表

※本年表は「郷土かしわ」の歴史年表をベースとし、末尾欄外に示す引用・参考文献より重要と思われる「できごと」を補足した。

時代区分	西暦	年号	主なできごと
原 始	旧石器時代	約4万年前 約3万年前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本列島に最古の明確な石器が出現</li> <li>・常磐自動車道柏地区に旧石器時代の遺跡が現れる（聖人塚、中山新田、元割遺跡など）</li> <li>・環状ブロックの形成（中山新田Ⅰ遺跡）</li> <li>・長期間の人々の営み（聖人塚遺跡）</li> <li>・本の木型石槍の生産（元割遺跡）</li> </ul>
	縄文時代	約1万5千年前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土器の使用が始まる</li> <li>・狩猟や採集の生活が続く</li> <li>・本格的なムラがつくられ始まる（鴻ノ巣、花前遺跡）</li> <li>・前期前葉の黒浜式期の集落が出現（若葉台遺跡、花前Ⅰ遺跡）</li> <li>・貝塚を中心に大集落ができる（布施貝塚、林台遺跡）</li> <li>・中期前葉の阿玉台式期の集落が展開（聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡、水砂遺跡）</li> <li>・中期中葉～後葉の環状集落（小山台遺跡）</li> <li>・中島遺跡、岩井貝塚</li> <li>・宮根遺跡</li> </ul>
古 代	弥生時代	前10世紀後半～前8・7世紀 紀元後239	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大陸から北九州に稲作が伝わる</li> <li>・大陸から青銅器、鉄器が伝わる（今のところ柏市内では弥生時代 早・前・中期を示す明確なものは発見されていない）</li> <li>・邪馬台国の女王卑弥呼が倭国王になる</li> <li>・笹原、中馬場遺跡（弥生後期）</li> </ul>
	古墳時代	538 593 飛鳥時代 607 645 646 701	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前方後円墳がつくられる（大王が支配する大和政権）</li> <li>・戸張一番割、戸張城山、石揚遺跡（古墳前期）</li> <li>・北ノ作1号・2号墳</li> <li>・弁天古墳（古墳・中期）</li> <li>・花野井大塚古墳</li> <li>・小規模な集落が出現（花前Ⅱ-1遺跡、矢船遺跡）</li> <li>・集落規模の拡大（上貝塚遺跡）</li> <li>・百済から仏教伝わる</li> <li>・聖徳太子が推古天皇の摂政になる</li> <li>・柏・我孫子あたりは朝廷の御名代（みなしろ）として直接支配される</li> <li>・小野妹子を遣隋使として隋に送る</li> <li>・市内各所に小円墳がたくさんつくられる</li> <li>・総の国を二分して南部を上総、北部を下総とした</li> <li>・大化改新の詔が発布される</li> <li>・大宝律令ができる</li> <li>・下総国府（市川市国府台）置かれる</li> <li>・根戸周辺に大集落ができるようになる（中馬場遺跡）</li> </ul>
	奈良時代	710 721 741 771	和銅3 養老5 天平13 宝亀2
平安時代	794 823 935 1126 1130 1156 1167	延暦13 弘仁14 承平5 大治元 大治5 保元元 仁安2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平安京（京都）に遷都</li> <li>・この頃本格的な製鉄の展開（花前Ⅱ-2遺跡）</li> <li>・空海、布施弁財天に紅竜山東海寺を建立（東海寺縁起による）</li> <li>・平将門反乱をおこす</li> <li>・相馬御厨成立</li> <li>・平常重、布施郷（相馬御厨）を伊勢皇太神宮領に寄進（志子多谷、手下水海の名みえる）</li> <li>・保元の乱に、千葉介常胤（相馬郡司）、源義朝に従って参加</li> <li>・平清盛が太政大臣となる</li> </ul>



時代区分		西暦	年号	主なできごと	
古 代	平安 時代	1180	治承4	<ul style="list-style-type: none"> <li>源頼朝伊豆に拳兵</li> <li>千葉一族協力する</li> </ul>	
		1185	文治元	<ul style="list-style-type: none"> <li>千葉介常胤本領安堵（相馬御厨の下司職）を得る</li> <li>守護, 地頭の設置</li> <li>千葉介常胤「下総一國守護職」に補任</li> </ul>	
中 世	鎌倉 時代	1192	建久3	<ul style="list-style-type: none"> <li>源頼朝征夷大將軍に任ぜられ, 鎌倉に幕府を開く</li> </ul>	
		1204	元久2	<ul style="list-style-type: none"> <li>相馬次郎師常（常胤の次男）没</li> </ul>	
		1227	嘉禄3	<ul style="list-style-type: none"> <li>相馬五郎能胤が娘土用（むすめとよ）に相馬御厨内の手加, 布瀬, 藤心, 野木崎らをゆずる</li> </ul>	
	南北朝 時代	1334	建武元	<ul style="list-style-type: none"> <li>建武の新政</li> </ul>	
		1338	延元3	<ul style="list-style-type: none"> <li>足利尊氏, 征夷大將軍となり幕府を開く</li> </ul>	
	室 町 時代	戦国 時代	1462	寛正3	<ul style="list-style-type: none"> <li>高城胤忠, 根木内城構築</li> </ul>
			1467~77	応仁元	<ul style="list-style-type: none"> <li>応仁の乱</li> </ul>
			1478	文明10	<ul style="list-style-type: none"> <li>太田道灌, 国府台に陣し, 千葉孝胤と境根原で戦う</li> </ul>
			1537	天文6	<ul style="list-style-type: none"> <li>高城胤吉, 小金大谷口城構築</li> </ul>
			1538	天文7	<ul style="list-style-type: none"> <li>北条軍と小弓軍国府台に戦う</li> <li>北条軍勝利</li> </ul>
近 世	安土 桃山	1564	永禄7	<ul style="list-style-type: none"> <li>国府台後の戦, 里見氏, 北条軍に敗れる</li> </ul>	
		1573	天正元	<ul style="list-style-type: none"> <li>室町幕府滅ぶ</li> </ul>	
	江 戸 時 代	戦国 時代	1590	天正18	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊臣秀吉の統一</li> <li>高城氏滅ぶ</li> </ul>
			1600	慶長5	<ul style="list-style-type: none"> <li>関ヶ原の戦い</li> </ul>
			1603	慶長8	<ul style="list-style-type: none"> <li>徳川家康將軍となり江戸に幕府を開く</li> </ul>
			1614	慶長19	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸幕府, 小金三牧と佐倉七牧を管理する</li> </ul>
			1616	元和2	<ul style="list-style-type: none"> <li>幕府七里ヶ渡を定船場とする</li> <li>本多正重が相馬郡内に1万石を領す</li> </ul>
			1641	寛永18	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸川開通</li> </ul>
			1641~43	寛永18~20	<ul style="list-style-type: none"> <li>寛永の大飢饉</li> </ul>
			1654	承応3	<ul style="list-style-type: none"> <li>伊奈備前守忠次, 利根川東遷に成功</li> </ul>
1663			寛文3	<ul style="list-style-type: none"> <li>大青田村と船戸村の草場をめぐる争いで双方の名主入牢</li> </ul>	
1671			寛文11	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸商人（海野屋作兵衛ら17名）による手賀沼干拓始まる</li> </ul>	
1702			元禄15	<ul style="list-style-type: none"> <li>大室村と高野村草場をめぐる争いで3人死に, 双方の名主入牢</li> </ul>	
1708			宝永5	<ul style="list-style-type: none"> <li>戸張村と大井村草場をめぐる争い</li> </ul>	
1724			享保9	<ul style="list-style-type: none"> <li>利根川沿いに流作場生まれる</li> <li>布施河岸が正式に成立</li> </ul>	
1725			享保10	<ul style="list-style-type: none"> <li>小金原で將軍吉宗鹿狩, 村々より勢子, 人足差し出す</li> <li>このころより代官, 小宮山奎之進, 牧付新田を開発させはじめる</li> </ul>	
1726			享保11	<ul style="list-style-type: none"> <li>小金原で將軍吉宗鹿狩</li> </ul>	
1727			享保12	<ul style="list-style-type: none"> <li>幕府年貢増収をねらって手賀沼干拓を始める</li> </ul>	
1729			享保14	<ul style="list-style-type: none"> <li>手賀沼開墾により千間堤完成(5年後決壊)</li> <li>手賀沼干拓竣工</li> </ul>	
1732			享保17	<ul style="list-style-type: none"> <li>享保の大飢饉</li> </ul>	
1737	元文2	<ul style="list-style-type: none"> <li>藤ヶ谷に鮮魚街道石橋が作られる</li> </ul>			
1738	元文3	<ul style="list-style-type: none"> <li>千間堤洪水により決壊</li> </ul>			
1745	延享2	<ul style="list-style-type: none"> <li>手賀沼再工事竣工</li> <li>利根川洪水のため千間堤再決壊</li> </ul>			
1748	寛延元	<ul style="list-style-type: none"> <li>水戸公, 小金原で鹿狩, 帰途, 弁天で参詣</li> </ul>			
1783~87	天明3~7	<ul style="list-style-type: none"> <li>関東一帯大飢饉(天明の大飢饉)</li> </ul>			
1787	天明7	<ul style="list-style-type: none"> <li>寛政の改革始まる</li> </ul>			
1790	寛政2	<ul style="list-style-type: none"> <li>船戸・小青田等16ヵ村・水戸公の鷹場の免除を願い出る</li> </ul>			
1795	寛政7	<ul style="list-style-type: none"> <li>小金原で將軍家齊鹿狩</li> </ul>			
1849	嘉永2	<ul style="list-style-type: none"> <li>小金原で將軍家慶鹿狩</li> </ul>			
1853	嘉永6	<ul style="list-style-type: none"> <li>黒船渡来で世間騒がしくなり水戸街道の往来がはげしくなる（助郷増加）</li> <li>非常時（黒船渡来）のため, 村々から船戸, 藤心詰足軽勤番差し出す</li> <li>品川沖へ御台場建築のため根戸村御林から木材を江戸へ送る</li> </ul>			
1855	安政2	<ul style="list-style-type: none"> <li>下総布川の儒医, 赤松宗旦「利根川図誌」を著す</li> </ul>			
1867	慶応3	<ul style="list-style-type: none"> <li>大政奉還</li> </ul>			

時代区分	西暦	年号	主なできごと	
近代	1868	明治元	・旧領主本多紀伊守、駿河から安房国長尾藩（現南房総市白浜）へ移封	
	1869	明治2	・葛飾県の支配となる	
	1871	明治4	・小金、佐倉牧開墾会社設立、小金・佐倉牧廃止 ・ <b>廃藩置県</b>	
	1873	明治6	・葛飾県を廃止、印旛県となる	
	1873	明治6	・下総開墾会社を解散	
	1879	明治12	・豊四季村、十余二村誕生 ・千葉県となる ・第1回県会議員選挙、成島巍一郎（布施）、木村作左衛門（名戸ヶ谷）当選する	
	1888	明治21	・藤ヶ谷に鮮魚街道常夜灯造立	
	1889	明治22	・利根運河の工事始まる ・ <b>大日本帝国憲法発布</b> ・ <b>市町村制施行</b>	
	1890	明治23	・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村誕生	
	1894	明治27	・利根運河完成	
	1896	明治29	・ <b>日清戦争始まる</b>	
	1897	明治30	・常磐線（当時日本鉄道株式会社土浦線）、田端～土浦間開通、柏駅開設	
	1901	明治34	・成田線開通（成田～佐倉間開業）	
	1904	明治37	・成田鉄道（現成田線）我孫子～安食間開通（成田直通は翌年）	
	1911	明治44	・ <b>日露戦争始まる</b> ・県営軽便鉄道 柏～野田間開通（現東武アーバンパークライン）	
	大正	1914	大正3	・ <b>第1次世界大戦始まる</b>
		1920	大正9	・陸前浜街道は国道六号となる ・第1回国勢調査実施 柏市域人口24,908人
		1923	大正12	・ <b>関東大震災</b> ・北総鉄道株式会社、柏～船橋間開通（現東武アーバンパークライン） ・東葛飾中学校（現東葛飾高校）開校 ・詩人「八木重吉」が東葛飾中学校に赴任 ・柏郵便局に電報、電話事務取扱
		1926	大正15	・千代田村、柏町と改称（9月15日）
昭和		1928	昭和3	・豊四季に柏競馬場ができる
	1938	昭和13	・十余二に陸軍柏飛行場建設始まる	
	1939	昭和14	・ <b>第2次世界大戦始まる</b>	
	1941	昭和16	・ <b>太平洋戦争始まる</b>	
	1943	昭和18	・この頃柏町に軍需工場ができる	
	1945	昭和20	・ <b>広島、長崎に原爆投下、日本無条件降伏</b>	
現代	1947	昭和22	・利根遊水地の築堤始まる	
	1949	昭和24	・常磐線松戸～取手間電化	
	1952	昭和27	・国道6号整備着工（50年完成）	
	1953	昭和28	・南柏駅開設	
	1954	昭和29	・柏町、田中村、小金町、土村が合併「東葛市」となる ・小金町の大部分が松戸へ合併 ・東葛市に富勢村の大部分を編入し柏市誕生（11月15日）	
	1955	昭和30	・手賀村、風早村が合併し沼南村となる ・国勢調査 柏市の人口45,020人、沼南村人口10,911人、合計市域人口55,931人	
	1957	昭和32	・米軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）開設 ・国道6号（小金～青山間）で全線開通（12月）	
	1964	昭和39	・ <b>第18回オリンピック大会東京で開催</b> ・沼南村が沼南町となる ・柏市人口10万人突破（11月） ・国勢調査 柏市の人口109,237人、沼南町人口15,262人、合計市域人口124,499人	
	1970	昭和45	・ <b>日本万国博大阪で開催</b> ・国道16号（野田～千葉間）全線開通（4月） ・柏市人口15万人突破 ・沼南町人口2万人突破	
	1973	昭和48	・柏駅東口再開発事業完成 東口ダブルデッキができる（10月）	
1975	昭和50	・ <b>海洋博、沖縄で開催</b> ・柏市の人口20万人を突破（5月）		

時代区分	西暦	年号	主なできごと
現代	昭和	1979	昭和54 ・ 国勢調査 柏市人口203,065人、沼南町人口22,150人、合計柏市域人口225,215人
		1982	昭和57 ・ 米軍柏通信所（柏の葉）全面返還（8月）
		1985	昭和60 ・ 沼南町人口3万人突破
			昭和60 ・ 柏市の人口25万人を突破 ・ <b>科学万博，筑波学園都市で開催</b> ・ 常磐高速道路一部開通（柏～三郷）
		1987	昭和62 ・ 国勢調査 柏市人口273,128人、沼南町人口38,027人、合計柏市域人口311,155人
		1988	昭和63 ・ 運輸政策審議会において常磐新線の整備を答申（7月） ・ 柏市立十余二小学校開校
	平成	1989	平成元 ・ 沼南町人口4万人突破 ・ 柏市の人口30万人を突破（5月） ・ 国勢調査 柏市人口317,750人、沼南町人口45,130人、合計柏市域人口362,880人
		1991	平成3 ・ 税関研修所移転 ・ 柏の葉公園一部開園 ・ 千葉大学園芸学部附属農場設立 ・ 1都3県は宅地・鉄道一体化法に基づく基本計画を策定し、運輸・建設・自治大臣が承認
		1992	平成4 ・ 国立がんセンター東病院開院
		1994	平成6 ・ 常磐新線起工式（秋葉原～新浅草間）（10月）
		1996	平成8 ・ 緑園都市構想策定（3月） ・ さわやかちば県民プラザ開館
		1999	平成11 ・ 科学警察研究所移転 ・ 東京大学の物性研究所・宇宙線研究所が柏の葉キャンパスへ移転
		2001	平成13 ・ 常磐新線新名称を「つくばエクスプレス」に決定（2月） ・ 柏ゴルフ倶楽部閉鎖（9月）
		2003	平成15 ・ 千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター設立
		2004	平成16 ・ 柏市制50周年記念式典を挙行 ・ つくばエクスプレス開業「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」誕生（8月）
		2007	平成17 ・ 国勢調査 柏市人口380,963人
		2008	平成20 ・ 県立柏の葉高校開校 ・ 中核市となる(4/1)
		2011	平成23 ・ 柏の葉国際キャンパスタウン構想策定（3月） ・ 柏の葉キャンパスを中心とし、内閣府より「総合特区」及び「環境未来都市」の対象地域として指定（12月）
		2012	平成24 ・ 柏の葉小学校開校（4月）
2014	平成26 ・ 柏市制60周年		
2018	平成30 ・ 柏市立柏の葉中学校開校（4月）		

（引用文献）

柏市教育委員会. 2018. 郷土かしわ地理・歴史・公民編 平成30年度版. P99-114

柏市市史編さん委員会. 2007. 歴史ガイドかしわ. P238-241. 柏市教育委員会

柏市教育委員会. 2014. 柏市郷土資料室揭示 柏市略年表

（公財）千葉県教育振興財団. 2017. 常磐道の遺跡展図録

柏市議会事務局. 2018. 市政概要 平成30年版. P275-277

（参考文献）

柏市史編さん委員会. 1980. 柏市史年表. 柏市役所

柏市役所（最終更新日2018.1.11）柏市の歴史 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020300/p000077.html> 2018.8.27参照

柏市役所（最終更新日2017.3.8）旧沼南町の概要 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020100/p000138.html> 2018.8.27参照

柏市役所（最終更新日2018.7.2）柏市統計書 平成29年版 柏市の沿革 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p008433.html> 2018.8.27参照

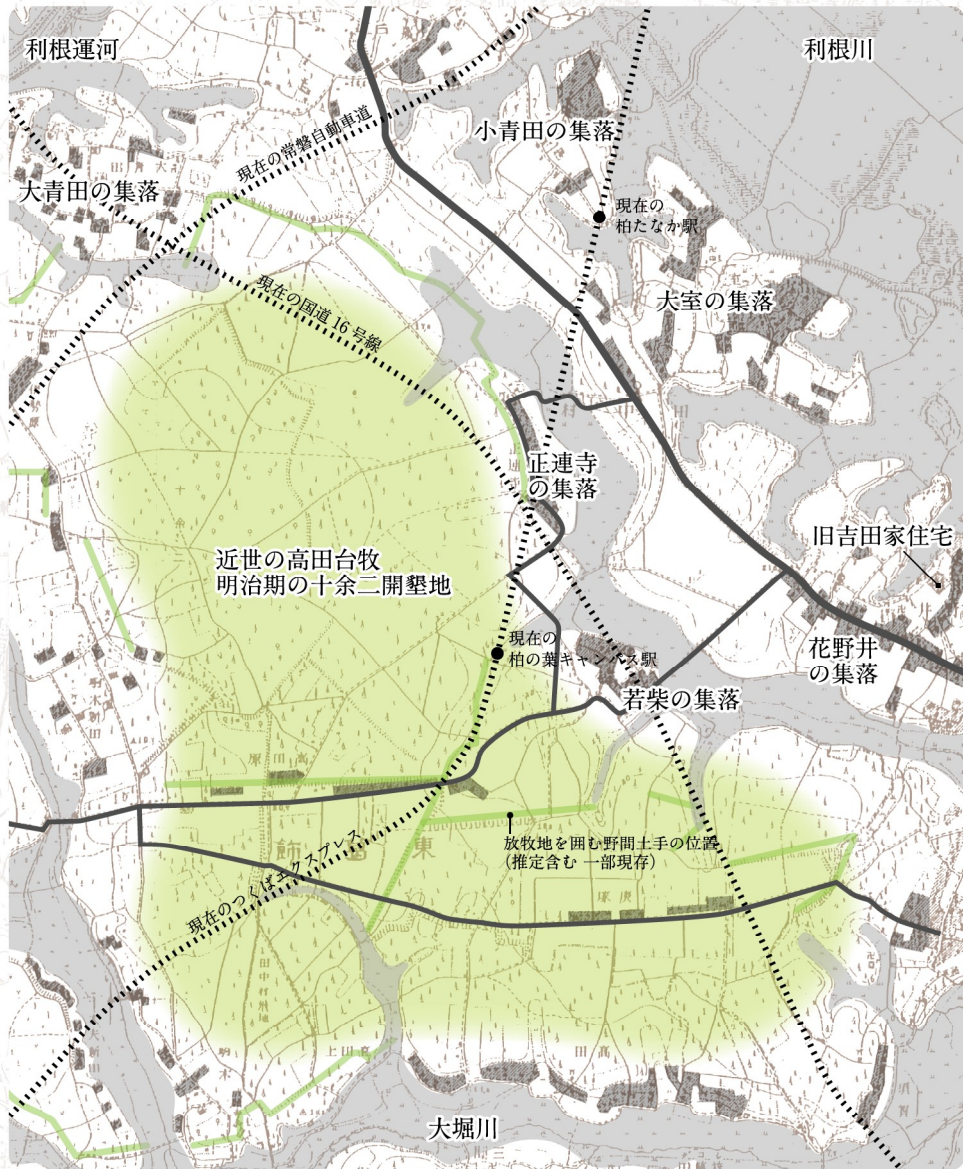
柏市役所（最終更新日2018.5.23）柏市都市計画マスタープラン平成30年4月 p7 都市の変遷 [www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm](http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm) 2018.8.27参照

「私たちの柏の歴史～牧から街へ～」制作プロジェクトチームメンバー

統括・代表	野田勝二（千葉大学環境健康フィールド科学センター） 大鷹秀生 笠羽英男 河合都志子 今野尚子 齋藤優子 下重野乃香 常盤 猛 中山千花 浜口勝美 校條邦夫 山口政子
制作協力	高野博夫（柏市生涯学習部文化課）
表紙・裏表紙デザイン	大野将司
印刷協力	柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）

発行者：千葉大学柏の葉カレッジ・リンクプログラム  
野田勝二  
発行日：2021年6月30日  
千葉大学環境健康フィールド科学センター  
〒277-0882  
千葉県柏市柏の葉 6-2-1





昭和初期までの柏の葉地域 (UDCK)

# 私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム